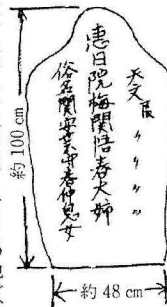


口 絵 解 説

天龍村大河内 お萬様の墓



天文十三年（一五四四）八月この地で、五歳の関長五郎と共に家来の伊藤惣十郎に殺されたと伝えられている。お萬は、新蔵盛永の妻、又は安芸守の娘、長五郎の乳母等の説がある。お萬様は権現城の落城の後、長五郎をつれて坂部の叔父をたより、その叔父にも見捨てられ生家の浪合へ向う道中であつた。郷戸峠から新野を目指して、途中足を痛め疲れたお萬親子を休ませ食を恵んでくれた恩沢家には、お萬様が御礼に残していったお椀が家宝として今も伝えられているという。

向方でカギ屋という家で休んだ時、夕顔のきれいに咲い

た花を長五郎が欲しがったが、その家の婆様が邪慳で花をくれなかった。悲しかったお萬様の恨みでその後は、この家では夕顔の花が血のような赤い花をつけ、実つても苦くて喰べられなくなったという伝説がある。

伊藤惣十郎の案内で大河内の小川にそって歩いていて、背に負われていた長五郎に馬の通る様な道でないと指摘された事から、惣十郎は二人を殺して立去つたと伝えられている。惣十郎の主人への怨恨か、物盗りか、今は知る術もない。後に二人の死を哀れんだ村人は亡き骸を葬むり墓を建てた。長五郎の墓は明治時代に「順徳院慧明照大童子」と追号して建てられている。二本の松の太木に紫藤の老幹がまといっている。物語の悲しさを語る風情である。昭和三年県の指定天然記念物となつたが、藤の空洞化が進み指定がはずされた。植物としてはまだまだ力強く巨木にまといつき花が咲くという。少し離れた所にお堂が建てられて二人の位牌が祭られ、お萬様、長五郎の霊を慰さめ、たくさんの人形が供えられている。弓の奉納競技の金銭の額が壁一面に飾られている。毎年十月十二日の祭りの際、三河豊根村の弓友会の人達も加わり、にぎやかなお祭とおごそかに金銭の中の儀礼も行われている。（清内路村 原 勇二）

伊那谷における蚕糸業の隆替

三 浦 宏

飯田市美術博物館では「おかいこさま―伊那谷の養蚕業と人びとのくらし」（仮称）という特別展を企画している。「展覧会の趣旨」（案）によると、「伊那谷の歴史をふりかえるとき、養蚕と蚕糸業は忘れることのできない産業である。全国でも有数の生産地となり、その富は伊那谷をうるおし、政治・経済・文化などあらゆる方面に影響を与えている。伊那谷の人びとにとって、この産業は暮らしそのものであったともいえるほどであった。カイコを『おかいこさま』と呼び、蚕王さまを祀っていることは、両者のかかわりの深さを如実に物語っている。本展覧会は、養蚕業ならびに蚕糸業の実態を明らかにし、伊那谷の近代文化の特質に迫るとともに、この産業が伊那谷にもたらした影響の大きさを見直し、その将来的な可能性を探りたい」とその抱負を述べている（一九九三・九・二三、同館人文部門評議員会資料による）。この企画は同館において何時かどうしても扱わねばならぬテーマであり、まことに時宜を得たものといえよう。そこで、この際、伊那谷の蚕糸業に関するメモランダムとして、その隆替の軌跡を

たどってみたい。

一、養蚕の起源とシルクロード

桑を栽培し、その桑で蚕を飼育し、繭を生産するのがいうまでもなく養蚕である。養蚕の始まる前、長い間、人びとは野生の蚕（野蚕）の繭を活用していたと考えられている。元の王禎が書いた『農書』（一三三三）の第六巻に『淮南王蚕經に云う。黄帝元妃西陵氏始めて蚕す。蓋し黄帝衣裳をつくる。因て此に始する也』と記され、これが養蚕の起源とされている。中国の養蚕は他国と比較にならぬくらい古く、前漢（BC二〇二―AD八）時代には全土に広がり、シルクロード（オアシス・ルート、ステップ（草原）・ルート、マリン（海）ルート）を通じて周辺地域へ拡大していったといわれている。

二、わが国における養蚕業の軌跡

日本での養蚕を示す最も古い記録は『魏志倭人伝』にあり、

三世紀中頃には朝鮮半島經由で中国から伝えられていたことがわかる。二四三年には倭王が「倭錦」など魏に献じたことを記している。大化改新(六四五)、つづく大宝律令(七〇一)の班田收授により、公民に口分田が与えられ、租・庸・調などの税が課せられた。調物として絹や麻を納めさせたので、奈良時代には近畿、関東、東北まで養蚕地域がひろがり、平安時代には全国におよんだという。江戸時代になって、貞享二年(一六八五)、中国産の白糸が、糸割符(江戸時代、外国船がもたらした白糸(生糸)の売買について、幕府から堺・京都・長崎・江戸・大坂の商人に許可した独占権)の制度復活で輸入が制限されたのを契機に、特に信州を含む東山道諸国において盛んになったが、安政開国以前には桑畑はほとんどなく、桑樹は主に田畑の土手や屋敷のまわりに植えられていた。養蚕に活気が出てくるのは安政五年(一八五八)の開港による生糸輸出の開始からで、この時点から、桑畑が各地に出来るのである。伊那谷の乏水地域(扇状地段丘)の開発がはじまるのもこの頃からとみられる。

第一次世界大戦は日本の養蚕業に大きな変化をもたらす契機となった。すなわち、日本種、中国種、ヨーロッパ種のうち二つを交配して作った一代交雑蚕種という優良品種によって蚕種の統一が進み、単位蚕種量当りの取引量が急増し、繰糸能率もよくなった。これにより、日本の製糸業が中国やイ

三、製糸業の推移

室町時代以後、京都の西陣で絹織物業が盛んになるが、その原料のほとんどは中国産の「白糸」であった。しかし、前述の貞享二年江戸幕府がこの白糸の輸入を制限したことにより、岩代(福島県)、上野(群馬県)、信濃など東山道諸国の蚕糸業が勃興し、多量の「為登糸」(地方から都へ送る糸)が西陣へ送られることになった。安政開国は輸出向け生糸の生産を激増させたが、当初、日本の生糸はイタリア、フランスの生糸に比べて品質が劣り、絹織物の横糸にしか使用されなかった。一九〇〇(明治三三)年代になって縦糸用の優良な生糸も生産されるようになり、明治四二年(一九〇九)にはイタリア、中国を抑えて、世界一の生糸輸出国となり、全国生糸生産量の三分の二、四分の三が年々輸出されるようになった。大正一二年(一九二三、関東震災)までは横浜が生糸の主輸出港、以降、神戸が参入する。

万延元年(一八六〇)諏訪へ上州座繰器が導入され、従来の手挽に比べて、労働生産性は二倍に向上し、マニユファクチュアー(工場制手工業)もあらわれた。明治五年(一八七二)官営富岡工場が創設され、長野、山梨、岐阜三県を中心に多数の器械製糸が設立されたが、多くは一〇—三〇人繰の小規模なものであった。器械製糸による生糸生産量が座繰の

タリアの製糸業を大きくリードすることになったが、この時期に長野、埼玉、山梨、群馬などが大規模養蚕地域となる。これらの県に共通する立地条件の一つは広い乏水地域、すなわち、扇状地、段丘、火山山麓、洪積台地をもっているというところで、乏水に強い樹木作物である桑樹による開発の進展があったとみられる。大正五年(一九一六)の養蚕戸数は全国で一六七万戸(全農家数の三二%)であったのに、昭和四年(一九二九)には二二二万戸(全農家数の四〇%)と一三年間に五五万戸も増加したのである。一方、養蚕農家は製糸家による繭の買いたたきに対抗するため養蚕組合を結成し、大正一四年(一九二五)には過半の養蚕農家が組合に加入した。昭和二年(一九二七)にはじまる大恐慌以降の繭価暴落につき、昭和九年(一九三四)には原蚕種管理法、昭和十一年には産繭処理統制法など国家の統制がつよまった。

太平洋戦争中には養蚕農家は激減し、昭和二〇年(一九四五)には約一〇〇万戸、昭和五六年(一九八一)には約一五万戸、繭生産量は約六万トンとなり、日清戦争当時の状態となった。この背景には化学繊維の発達、中国・韓国の安い生糸の進出がある。昭和五五年(一九八〇)には群馬、福島、埼玉、長野、山梨の五県で全国産繭量の六七%を占めている。

それを凌駕するのは明治二七年(一八九四)以降である。器械製糸場では未婚の女工たちが長時間労働を強いられ、明治三四年(一九〇一)当時、諏訪地方の労働時間は「決シテ十三・四時間ヲ降ルコトナク、長キハ十七・八時間ニ達セル」(「職事情」)ありさまであったし、下伊那地方においても、『明治期末の製糸工女の労働』(阿智村誌下巻四六九頁「会地村役場資料」)時間は「一日一四時間以上」で中堅工女でも米一升買えぬ賃金(拙稿、一九八九、伊那二二号)であった。

四、伊那谷における蚕糸業の隆替

江戸期には本田畑には米のほか大麦、小麦、稗、大豆、小豆などの穀類のほかは正式には作ることが出来なかったから、養蚕は僅かなものであった。江戸中期、享保五年(一七二〇)、向関村(阿智村の内)明細帳に「蚕少々かい申候、手前遣用斗りに御座候」(同村誌上巻七一八頁)とあるように中期に入っても自家用に飼う程度であって、純(悪)絹、太糸で織った粗製の絹布をつくる程度のものであった。しかし、この頃から商業経済が次第に発達し、町人階層を中心に絹織物に対する需要が高まり、生糸の商品価値はあがった。そこで、桑は新しく開墾した原畑・川原畑などで作られるようになったが、安政開国の幕末期には本田畑まで拡大する傾向をみせた。すなわち、

「近年田方へ桑植候もの多有之哉二相聞以之外之事二候、五穀を廃し蚕を専二致候而は不可然候、閑地へ植付候ハ当然之儀二候得共、田方は勿論畑方等新規ニ桑植付候儀決而不相成候事二候、右之通御料私領寺社領とも不洩様可相触候子（元治元年カ）四月」

（阿智村誌 上巻七一頁）

〔近年、本田へ桑を植える者が多くあるやに聞くがもつてのほかのことである。本田畑以外の閑地へ植えるのは、時節柄、当然のことであるが、本田畑へ新たに桑を植えつけることはあいならぬことである。このことを天領、私領、寺社領へもらさぬよう通知するようにしよう』というほどの意である〕という文書が残されているように、養蚕への傾斜はとめどない流れとなっていくのである。安政開国より一〇年後のことである。

明治七年（一八七四）『上中関村田畑一筆地引帳』によれば、この村では畑の九三％が自作地であったが、この自作畑で桑五六六貫、小作畑で七六貫を收穫している。農家総数一〇一戸のうち、二一戸が養蚕を営み、一、三ha以上の田畑所有者九戸はすべて養蚕を行っているが、桑収量は最高四〇貫に過ぎない。この事実から推量すると、養蚕は経済的にゆとりのある上農階層に取り入れられ、漸次ほとんどの農家に及んでいったものと思われる。同年の『府県物産表』によると、

長野・筑摩両県の繭生産額は四一万貫、熊谷県（群馬県と埼玉県の一部）の生産額二〇五万貫の約五分の一で、新潟県や山梨県とほぼ同額であった。ところが約一〇年後の明治一〇年代末になると本県の繭生産額は全国第一位に躍進するのである。

養蚕業者は春繭の蛹を殺さずに発蛾させ、台紙に卵を生みつけさせ、その蚕卵紙を養蚕家に販売した。本県の養蚕業の中心は上田・小県地方であった。慶応元年（一八六五）、蚕種輸出公認以来、明治一〇年（一八七七）まで、蚕種はわが国総輸出額の一〇％前後を占め、本県はその四〇・一五〇％を占めていた。下伊那の蚕種生産高は明治一八年（一八八五）、春蚕では本県一六郡中二位であったが、二〇年後の明治三八年（一九〇五）には小県、埴科両郡につづいて第三位に浮上している。

生糸売込商として著名なのは飯田の田中平八、松代の大谷幸蔵、辰野の小野光景等であるが、田中は西春近から飯田へ養子、横浜開港とともに生糸、茶を扱って巨利を得「天下の糸平」と呼ばれたのは周知のことであるが、ほぼ同時期に開産社（生糸）社長などとして活躍した長谷川範七（喬木村）もいる。

明治中期以降、本県製糸業の発展は全国的にみても目をみはるものがあり、明治二〇年（一八八七）代後半になると、

器械製糸においては全国一となり、明治三二年には工場数、労働者数とも全国の三分の一を占めるに至った。下伊那は諏訪、上高井、東筑摩の三郡とともに明治初期には座繰製糸の発達は他郡に比べ中程度であったが、その後、急速に器械製糸が発展したという地域的特色がある。県史によれば、小県埴科は本県座繰製糸の中心地であったが、器械製糸の発達は前述四郡ほどではなかった。これに対して、上・下水内、更級は座繰製糸も器械製糸も明治初期から三〇年代に至るまであまり振わなかった。このことから、長野県が器械製糸において全国一となる一翼を下伊那も大きく担っていたことがわかる。

明治二八年（一八九五）、片倉兼太郎が片倉組を組織したが、これは弟の光治、今井五介、従弟の片倉俊太郎などの同族組織で明治三〇年代末には川岸、下諏訪、松本、飯田および県外に七製糸所をもち、総釜数一、七〇〇余におよんだ。

また、本県製糸工場の県外進出は飯田の伊那製糸会社吉沢利八が明治三二年（一八八九）に愛知県小牧町（小牧市）へ進出したのに始まる。下伊那は組合製糸が集中的に発達したところであるが、大正一五年（一九二六）の調査によると県内組合製糸七七工場、八、八一七釜のうち、下伊那には三四工場（全県の四五％）四、一二釜（同四七％）があった。下伊那で組合製糸が発展した理由は地元有力な製糸家が少な

かったこと（拙稿『大正初期における下伊那地方の製糸業』伊那、一九八九、二二号）、養蚕業が急速に発達し、大規模養蚕家が多かったことなどがあげられるが、ほかに、機を見るに敏なる個人製糸の経営者が景気の動向を察知して、経営から手を引き、やむを得ず、養蚕家が共同出資して個人製糸を買収し、組合製糸を組織した形跡もある。例えば、『有限責任扶桑館信用販売組合』は大正七年（一九一八）、一〇月一八日、会地・伍和の養蚕家一九九名が出資し、個人製糸繰糸釜数一〇四個はか一切の施設々備を二七、五〇〇円で買収し経営に乗り出している。第一年度の事業報告書には販売実績として

『生糸事業初年度ノコトトテ設備完成原料統一マデニ至ラズト雖モ供繭繰糸販売等何等ノ支障モナク其事業ヲ遂行シ相当ノ利益配分ヲ行フコトヲ得シハ時機適合ト組合員一致協同従事員ノ刻苦ト精勵ノ結果ニ外ナラズト信ズ目下ノ如キ物価ノ急転ハ来年度事業経営ニ於テ大ニ注意警戒ヲスベキコトナリ』

生糸売却方ハ横浜伊藤合名会社へ出荷シ夏挽糸ハ全部前約売ヲ為シ春挽ニ至リ甲九十番館へ成行約定ヲナシ五百斤ツツ毎月五ノ日三回渡ヲ為ス最高価三、四九〇円ニシテ最低価二、二五〇円平均二、七五〇円強トナル』

と記述され、『目下ノ如キ物価ノ急転ハ来年度事業経営ニ

於テ注意警戒ヲスベキコトナリ」と次年度に対する危惧の念を表明しているが、第二年度（大正九年）の事業報告には「本年度事業ノ概況ヲ述ブレバ前年末好況ノ持続セル經濟界ハ三月ニ至リ株式ノ暴落ヲ端緒トシ急転直下殊ニ繭糸市況ノ一大頓挫ハ主産地ノ産業界ヲ不安ノ悲境ニ沈淪セシムル一方ニ物価ハ比較的下落ノ傾向之レナキ為メ生産費ハ依然ト変ズルコトナキニ反シ販売品ハ益々下向シ五六月ノ交ニ至リ資金ハ愈々梗塞ヲ逞フシ事業ハ益々經營難ヲ告ゲ如何トモ詮便ナカリシ（中略）。夏挽ハ横浜伊藤合名会社及日米生糸株式会社ノ二店ニ毎月四回（五日、一日、二五日、三〇日）五百斤宛價格成行相場ニテ甲九〇番へ売却セシモ春挽ニ至リ糸価益不況ノミナラズ黄ノ二十一中ヲ繰セシモヲ以テ夏挽（十四中ヲ約束）ノ約束ヲ履行スルヲ得ズ遂ニ他ノ方法ニ依リ売却スルコトナリ多クハ帝國蠶糸株式會社へ売却ス本年度最高價格一、六三〇円、最低價格一、二五〇円平均一、四六二円ナリ」と記述されているように、第一年度報告書に見られる「物価急転、注意警戒」が現実のものとなり、第二年度には早くも繭市況は暗転し、前年度繭価の半値に暴落してしまうのである。柔軟な企業家の対応に対して、組合製糸経営の難しさを物語っている。

明治四〇年（一九〇七）の本県總収繭量に對し、一八年後

の大正末、すなわち大正一四年には約二倍に増加した。この間、県全体の桑園面積は一・六倍、下伊那では一・七倍に拡大した。昭和二年（一九二七）三月金融恐慌がおこり、昭和四年大恐慌となった。繭価は暴落、大正一五年の繭価を一〇〇とする指数は昭和五十六年には三〇前後となったが、肥料、飼料、蠶種は低落せず養蠶農家は苦境に立ちいたった。暴落した農産物価格は、米、麦が昭和六年、繭が昭和九年に底をつき以後回復に向った。昭和五年の『扶桑館製糸組合理業報告書』には「本年度ニ入りテ糸価ノ惨落ハ廃止スル処ヲ知ラズ、年々不況ノ名モ此処ニ至リテハ通り過ぎテ只呆然タルノミ。（中略）斯ク低落ノ極ニ達スレバ達スル程、優良ナル品を安価ニ生産スルニ非ザレバ、此ノ不況ノ打開ヲナシ（下略）」と嘆ぜしめ、『蠶糸改善規格統一の要項』を傘下組合員に配布している。この年は繭価一貫匁三・七五kg当り三円一五銭で年末配分もできなかった（拙著『伊那谷山村の変貌』八三頁、一九八八）。このような状況下において旧山本村のように桑園面積の拡大を以て対応しようとした村もあったが下伊那の大勢は桑園を縮小し、多角的農業経営へと移行していくのである。

昭和十二年（一九三七）、日中戦争が始まり、翌年國家總動員法公布、平和産業の抑制、軍需産業強化と同時に、農業政策では食料と軍需農産物の増産に重点がおかれることとなっ

た。昭和十七年平谷村で温床苗代を始め、軽井沢町の荻原豊次は保温折衷苗代を考案し貢献した。これを要するに昭和恐慌と化学繊維の発達によって深刻な打撃を受けた蠶糸業は、日中戦争太平洋戦争戦後と衰退し、昭和五十六年（一九八二）には前述のように日清戦争（一八九四―九五）当時の産繭量に戻るのである。伊那谷蠶糸業の黄金時代は大正期を中心に据えた明治末、昭和初期の四半世紀であったと思われるが、衰退期に入った昭和七年（一九三二）―昭和九年でさへもこの地方ではなおかつ養蠶に依存しようとしていることは

旧会地村（阿智村）の事例（左表）でもわかつ。

年次	村總生産額(A)	蠶繭糸額(B)	(B)×100
昭和七年	五三五、八四七円	四七五、五五円	八・八%
昭和八年	三六五、四〇一円	二四〇、四二〇円	六・五%
昭和九年	三五二、五〇二円	一二四、四七五円	六・三%

（筆者 阿智村教育委員長

千三五一〇三 阿智村春日）

松尾における蠶種の歩み

（一）蠶種の歴史

大竜社史によると、我國の蠶種に関するところで歴史に登場したのは、第十四代仲哀天皇四年に、中国の切満王が帰化して蠶種及び珍宝を献じたときと書かれている。ついで文武天皇大宝年中、常陸国蠶影山の傍らに於て、専ら蠶種を製造し、市場を結城の地に開いて、近郷競って蠶種を試みるに至った

小木曾 正

といわれている。

そして長野県に於ては、小県郡塩尻村藤本家に於て、寛文年間蠶種を製造して販売したという。下伊那に所謂種屋ができたのは、江戸中期以後のことであるが、先進地の奥州や北信の種が「良い種」であつて原蠶種は両地方から入っていた。だんだん規模が拡大して養蠶家が増えてくると、蠶種の良いものを伊那谷でもつくることを考える人達が現われてき